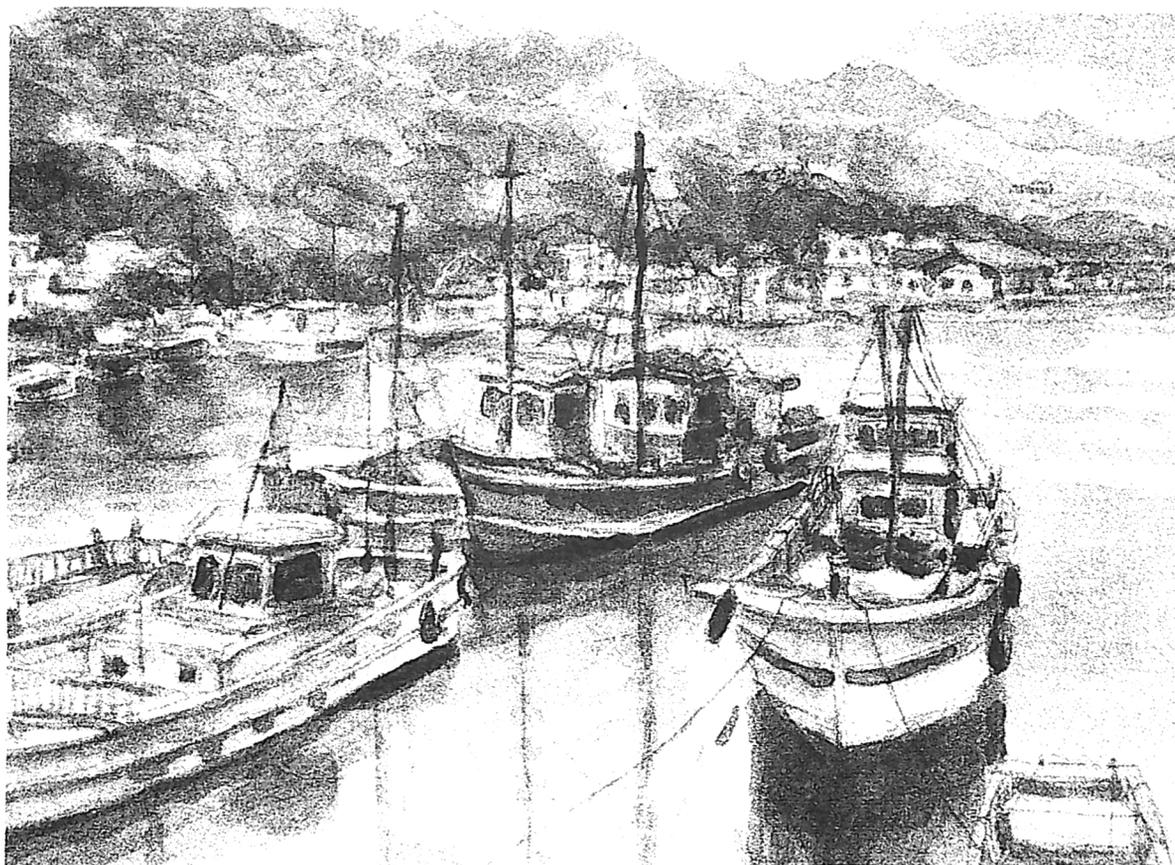


(社)日本技術士会 近畿支部

# まなま ぶだより

No66号  
2002-8-15



## 表紙の言葉

牛窓から、下津井港を経由して、瀬戸大橋が掛かる与島の西の隣りの島、本島に仲間とスケッチに立ち寄った時の一枚である。島へは、連絡船で渡りホテルに一泊した後、島内を数時間回った後、鷺羽山から瀬戸大橋をスケッチして帰る予定の忙しい旅であった。初日は天候に恵まれず、牛窓町では生憎の雨で十分な目的を果たすことができなかった。本島には夕方に着いたので、早朝ホテルの自転車を借りて訪れた漁港の風景である。停泊している漁船とバックの島の風景が落ち着きを感じるものがあり、現場のスケッチを元に油絵と水彩画に仕上げ町の展覧会に出品した水彩画である。 赤根晴雄 (機械部門)

技術士の知名度について、事ある毎にその低さを嘆く声を聞く。事実「技術士」を標榜して社会に出ても、「技術士って何ですか」との問いにショックを受ける事が多い。

技術士法によっても、「技術士」の名称を用いて仕事を行う事が許されているだけで、技術士でなければ行えない排他独占業務、いわゆる特権業務はない。

従って「資格を取るのが難しいが、取っても評価が思わしくない」との巷の風評となり、また資格を得た者も、「日本技術士会に入会しても、そのメリットがない」との考えから、技術士の日本技術士会の入会比率は20%に留まるのが現状である。

「技術士」制度は“科学技術の向上と国民経済の発展に資する”ことを目的に生まれたが、経済官庁とは離れた「科学技術庁」の管轄で発足した。「官」の縦割り行政の弊で産業活動と直結し難しい位置に置かれているのも事実である。「民」の経済は専ら企業の活動が中心であり、技術士は専らその帰属意識に支配された行動しか取れない企業内技術士の活動がその最たるもので、社会にその貢献を直接に印象づけるものではなかったし、この事は今も継続している。「学」の領域とは、技術は些かその領域を異にしており、学会のギルド性には馴染んで来なかった。

先人も技術士の知名度の向上の方向を模索してきた。勿論その功はあまり認め難いし、また現在の技術士会の方策も的を得ているとは言い難い。然し自覚の余り自虐に陥る事は他の悔いを招くのみである。また事を急いでも一時に知名度が上がるものでもない。

産業の新生のために、現在「産」、「学」、「官」の連携が事毎に叫ばれている。知名度の向上を意識しつつ、技術士の参入の機会を捉え、機会を重ねて技術士の社会的信用を増すべきであろう。

目 次

巻頭言「技術士の知名度」	稲本 渡	-----	2
産学官の合同セミナー	加藤 薫	-----	3
平成14年度第1回支部長会議報告	加藤 薫	-----	4
平成14年度第2回理事会報告	西川 昭二	-----	5
日本技術士会第44回定時総会報告	稲本 渡	-----	6・7
支部における技術士CPDの支援と登録について	福岡 悟	-----	8・9
省エネルギー方策の検討	古賀 正雄	-----	10～13
私の旅だより	鎮 美香	-----	14・15
海外業務促進実行委員会平成14年度6月度議事録	江村 和朗	-----	16・17
海外業務促進実行委員会平成14年度7月度議事録	江村 和朗	-----	18・19
部会予告・報告		-----	20～28
第8回西日本・第2回CPD講演会案内		-----	28
編集後記		-----	28